

テレコム ルネサンスへの期待

Expectation for Telecom Renaissance



常務執行役員
通信システム事業本部長
西郷 英敏

通信の歴史が語られるとき、太古の狼煙を起源として説き起こされるか、あるいはグラハム・ベルによる電話の発明から始まることが多いように思います。いずれも距離を克服して、意思を伝達するという目的でのイノベーションの線上にあったと言えるでしょう。

その後テクノロジーの急速な進歩と社会資本の充実に伴って、通信の利便性は面的、質的、機能的に飛躍的な発展を遂げ、重要な社会インフラの一つとして成熟してきたのはご案内のとおりです。

この豊かな通信環境が整った今、ふと気が付くと、これまでの発展を支えてきたネットワークは「土管」と揶揄されることすら目に付くようになり、次の発展形が見通しにくくなった感もあります。

本テクニカルレビューでも何度か通信をテーマにして特集号を組んできましたが、これまではネットワークの基本技術を中心に構成されていたのに対して、今回の特集では利用技術や新たな付加価値を生む技術など、多様に広がっていることに気が付かれるでしょう。

一つの例として、IP通信の席卷とそれに伴う情報と通信の融合、コンバージェンスが挙げられます。これにより企業におけるワークスタイルが劇的に変化しました。企業とお客様を結ぶコンタクトセンタなどの形でビジネスの中にも溶け込んでいます。

一方、SaaSやクラウドに見られるようなネットワークのインテリジェント化・サービスの高度化により、携帯端末などユーザ側の高機能化と相まって、利用者が個を基軸とした多様なサービスをいつでもどこでも享受できるようになりました。IPTVなどブロードバンドならではのサービスが既に日常生活の中に組み込まれており、自宅でも外出先でも映像を楽しめる様になっています。

Twitterや動画配信など、これまで情報の受け手であったマスメディアからの情報発信も加速度的に増加し、

ある予測では数年後、ゼタバイトという馴染みの無い単位のトラフィックを、ネットワークインフラ、サービスインフラとして下支えすることになります。サービスの進展とともに、インフラには大規模化、高速化などの要求に加えて環境への配慮などの要件面と仮想化など技術的側面から、新たな進化が求められます。

さらに、従来のコミュニケーションは、主に何らかの発信者が存在して、その情報を受信者が受け取る形態で成り立っていたのに対して、自立的に存在する情報（あるいはセンシングをしてキャッチされた情報）を集めて「見える化」するような形態が模索されつつあります。人間の体に例えれば、体の隅々まで張り巡らされた神経網のような社会インフラネットワークになるのかもしれませんが。

OKIでは従来のネットワークの高度化に寄与するとともに、こういった新しい社会を作る取り組みにチャレンジしており、本特集号ではそれらをご紹介します。

歴史上有名なルネサンスという言葉は、14～15世紀のイタリアをはじめとするヨーロッパ世界に興った広範な文化革新の称であり、元来は<再生>を意味するフランス語であったことは、周知のとおりです。<暗黒時代>たる中世からの決定的な離脱を実現した輝かしい近代の黎明として、その革新的達成を代表とする偉大さと規範性は長く賞揚されてきたところです。

通信の変遷を世界史になぞらえて、今を暗黒時代と呼ぶつもりはありませんが、やや混沌とした状態を抜け出して、ルネサンスの時代が訪れることを強く信じたいと思っております。◆◆